

2008年度修士論文要旨

1. 川合 秀和

グリム童話における悪魔とその役割

—KHM29・31・100・101・120・125・189を中心に—

グリム兄弟によって集められた „Kinder- und Hausmärchen “いわゆる『グリム童話』には「悪い魔女」や「悪魔」といった、物語の中で悪役として設定されたキャラクターが数多く登場する。それらの中で魔女については、例えば魔女狩りとの関連やジェンダーの視点からの考察といった先行研究が多くなされているが、それと比較すると悪魔についての研究や考察はまだまだ少ない。しかし、悪魔もまたその国や地方の文化を知るうえで重要かつ魅力的な研究材料であることは間違いない。

そこで本稿では、『グリム童話』の中でも「悪魔」(TeufelあるいはTeufels-)という語のあらわれる物語において、その悪魔がそのストーリーにおいてどのような役割を持たされたキャラクターであるかということや、その悪魔の描写からルーツを探れるものについてはそのルーツも同時に考察していきたい。

まず第1章では、そもそも悪魔とはどういった存在であるのかを確認するために、『グリム童話』以前の悪魔を、つまり「悪魔の歴史」を、『グリム童話』あるいはドイツに関わってきそうな部分を見ていく。本稿としては特に北欧神話などキリスト教以外について知ることが重要である。

続いて第2章において、本題である『グリム童話』に登場する悪魔を個別に確認する。そしてそれによって、『グリム童話』における悪魔がキリスト教だけではなく北欧神話やギリシア神話、ロマの伝承など様々な文化・宗教が混ざり合って形成されたものであり、そのルーツが異教の神であるものなどに関しては、「悪魔」であっても物語中におけるその役割は必ずしも「悪」ではないということがわかる。

最後に第3章でまとめとして、1-2章を踏まえて『グリム童話』全体を通しての悪魔の特徴を考察する。『グリム童話』に登場する悪魔達は、異教の神や自然界の王といった超自然的な存在や、ゲルマンやケルトの伝承に見られる小人や妖精などの性質を持つものが多く見られた。そしてその「悪魔」の「悪」の面に関しては、その多くが金によって人間と契約を結ぼうとする一種の「誘惑」でこそあるが、残虐性などの直感的に有無を言わず悪であると判断できるような「悪」に関しては、一応は人間である悪い魔女たちのそれに遠く及ばない。「誘惑」の際の契約内容に関しても正当な、文面通りの解釈でさしつかえない契約であることも少なくない。さらにもう一つの特徴として、悪魔はその悪に対する「罪」として「罰」を受けることはあまりないが、その一方で魔女達、つまり悪い人間の罪に対しては、焼き殺されるなどの非常に重い罰が用意されていることが多い。真におそろしい存在は「悪魔」よりも「悪人」であるという教訓と、また重い罰を強調することで「悪人」にならぬようにという戒めであろうか、それがグリム兄弟というフィルターを通してはいるものの、基本的には民間伝承である『グリム童話』において描かれている点は興味深い。

「悪魔」が絶対的な「悪」ではない。このことは「悪魔」という存在の概念を根底から揺るがす。KHM29の金の毛が三本ある悪魔は知性的であり、おばあさんに対しては人間的な面を見せ、悪魔のおばあさんにいたってはただの慈悲深いおばあさんであり、優しい人間のおばあさんや賢女達となんら変わるところがない。KHM100の小人の悪魔は、勤めを果たした人間に対して誠実で優しく、文字通り兄弟であった。KHM120の悪魔は途方に暮れた3人の主人公を救い、真の悪である宿屋の主人の罪を明らかにした。これらの存在は明らかに日本語で「悪魔」と呼ばれているそれとは異なる。彼らは日本語でいうならばせいぜい「妖怪」ぐらいではないだろうか。もはや Teufel はキリスト教的な絶対的な悪の象徴としての悪魔ではなく、人間の善き隣人ともなりうる「トイフェル」という名の一種の精霊であり、元々土着の神や小人などであった彼らの性質や地位をある程度回復させている。

ゲーテは『コリントの花嫁』で、ハイネは『精霊物語』で、ヤーコプ・グリムも『ドイツ神話学』で、キリスト教化の過程における、土着の神々・

巨人・精霊・妖精・小人たちへの迫害、悪魔化を批判しているが、『グリム童話』はそのようなある種攻撃的な批判ではなく、民間に伝わる素朴で愛らしいものの中に、キリスト教化されたドイツの中でひっそりと生き残っていた後世に残すべき本来のドイツ的な文化を見出し、それらをもう一度表舞台に上げて、世界的な時代を超えたベストセラーを世に送り出したことによって、文字通り「子供と家庭」という人間にとって基盤となる部分の内側にその精神を刻みこむことに、また記録として永久にその文化を保存することに成功したのである。

2. 田原 都代

古習俗の冬祭り

— オーストリアにおける聖ニコラウス祭と聖トーマス祭りを中心に —

当論文の大きなテーマは「冬至祭」です。本文では、オーストリア山間部の冬祭りを中心として論は展開していきます。その際、出来る限り、日本における冬祭りにも言及するよう努めました。というのも、日欧類似祭の比較がこの論文の狙いであります。

日本の冬祭りというと、やはり雪深い東北地方を想像するかもしれませんが。すでに秋田県の冬の風物詩となった「ナマハゲ」もその一種で、ナマハゲは単なる鬼ではなく、季節の変わり目に人々に恵みを与えにやってくる「トシガミ」という神です。しかし、こういった一見すると恐ろしい奇妙な神は、実は、日本列島の北から南まで各地に存在します。容姿だけではなく、その祭りの工程の類似性をも考慮に入れると、日本国内の最南端は、八重山諸島群にまでその分布が認められます。そしてこれらの祭りが、海を越えた、はるかアルプス山脈周辺の山岳地域で今もお生き続ける冬祭りと、形態もその内容までもが酷似しているのです。

ヨーロッパの冬祭りと聞くと、誰もが、赤鼻のトナカイにサンタクロースといった、楽しいクリスマス風景がまず頭に浮かぶことでしょう。しかし、このキリスト教の祭りは、現代のクリスマスの元型である古習俗

の祭り、つまり、キリスト教が主たる宗教になる以前の冬祭りが、様々な影響を受けながら、現在の、われわれに馴染み深いクリスマスという行事に変化していったものです。先に述べた日本の冬祭りとの共通点は、これら古習俗の祭りの中で、確かに認めることが出来ます。

本来サンタクロースも、いわば、ナマハゲ同様の存在でした。ヨーロッパでは、「聖ニコラウス」という名称でも有名です。つまり、優しいおじいさんという面だけではなく、子どもを脅していさめる役割も持っていたのです。しかし、ここでむしろ注目すべきは、聖ニコラウスの従者としてニコラウスとともにやってくる「従者クランプス」という存在です。クランプスの姿かたちは、まさしくヨーロッパのナマハゲと称してよいほど、ナマハゲと酷似しています。

彼らは、聖ニコラウスが善良なる優しい聖人である一方、非常に恐ろしい悪魔的要素を持っています。木のムチを振り回して人々を叩き、追いかけて、聞き分けのない子どもや、親の言う事を聞かない子どもを、背負ったかごに放りこむなどといわれる恐れられる存在です。

オーストリア滞在中に私自身が実際に体験した、聖ニコラウスやクランプスが登場する祭りを例に挙げ、実際の写真とともに日本の冬祭りとの類似性を明らかにしていきます。それと同時に、そこから、祭りの元来の姿、神や鬼のような姿をしたもののルーツ、そしてその正体は一体なにであるのかを、検証していきたいと思います。

3. 富岡 敦子

ドイツの中で多文化はどのように描かれているか

—ドイツの英語教科書におけるステレオタイプについて—

本論は、“*Common European Framework of Reference for languages*” “が出来る以前のドイツにおける英語の教科書を、特に「ステレオタイプ」に焦点を当て論述している。

2001年に作成された“*Common European Framework of Reference for languages*”、通称 CEF はヨーロッパ全体の外国語教育の基準となるものである。ここでは、歪んだステレオタイプがないような教科書作りを推

奨している。しかし、CEF が出来る以前は国ごとで教科書を作成していたため、他の国に対する歪んだステレオタイプが存在する可能性がある。そこで1970年～2002年までのドイツの英語の教科書を分析した。

ドイツの英語の教科書を分析するにあたり、分析対象であるドイツの教科書制度について主な特色を3つあげると、第一に教科書がどのようなものであるかについて、統一的な規定はないということ。第二にドイツではほとんどの州が教科書を貸し出している教材の無償制度があるということ。第三に教科書の編集は、民間の教科書発行者により行われていることである。各州が学習指導要領を定め、学校種類が多様であることなどにより、教科書発行者には多数の採択を得るための編集上の対応が求められることになり、そのためドイツには全体でおよそ3000の学習指導要領が存在するといわれており、教科書発行者はそれに対応しなければならないのである。

ドイツの英語の教科書の分析に先立って、CEF の中にでてくるステレオタイプの概念とはどのようなものを示しているのかということを確認するために、Klaus P. Hansen の „*Kultur und Kulturwissenschaft*“ を参考にした。概念だけでなく、より具体的な分析を行うためのステレオタイプについては、イギリスの Gentleman に的を絞った。イギリスの Gentleman については、Hans-Dieter Gelfert の „*Typisch englisch*“ という本の中で具体的なイギリスのステレオタイプについて言及しているため、それを参考にした。

特に、Gelfert の述べるドイツ人の持つイギリスの Gentleman に対するステレオタイプがどのようなものかということ、日本人は、Gentleman と聞くと丸みを帯びた黒い帽子をかぶり、黒いコートを着てステッキをもっている男性の姿を思い浮かべるのに対し、ドイツ人は Gentleman の性質として、控え目だが謙虚や遠慮ではなく、ゆさぶられない自尊心を、Gentleman の礼儀作法として、決して厚かましくならないことなどを挙げている。つまり、ドイツ人にとって Gentleman と聞いて思い浮かべるのは外見的なことだけでなく、性質や礼儀に関しての内面的なことに關してまでつつこんで考えるということである。

以上のことを踏まえての教科書の分析方法としては、ドイツの英語の教科書の中にゆがんだイギリスのステレオタイプがどのくらいあるのか

ということを一つ一つ調べるといいうやり方を取った。まず表を作り、どのくらいステレオタイプがあったのかということを確認にした。

その結果は、予想に反してイギリスのステレオタイプといえるような箇所は少なかった。1965~2002年のドイツの英語教科書は、CEF がまだできていなかったのにもかかわらず、ステレオタイプに関していえば、CEF に即した教科書であるということがいえる。つまり、CEF のできる以前の教科書は CEF のガイドラインに沿っていないため、CEF が教科書を中立的な立場で作られるために規制しているゆがんだステレオタイプが CEF 以前の教科書内にあるのではないかと最初にたてた仮説は、間違っていたということである。

理由としては、二つ考えられる。一つは、今回入手した教科書の中で1990年10月3日のドイツの統一以前のものはすべて西ドイツのものである。日本でも GHQ が参入したことによって教科書は全くといっていいほど変わったように、ドイツにも戦後アメリカがドイツの教育に参入し、様々なことを規定した影響ではないだろうか。もう一つは、ナチスの存在が世界的に有名であり、ドイツ人は必要以上に敏感にならざるを得ない。そのために、ドイツにとってステレオタイプとは、CEF 内に書かれている歪んだステレオタイプ、Hansen が述べた偏見、的中しないステレオタイプだけでなく、価値に対して中立的な立場をとっているステレオタイプを含むすべてのステレオタイプについても警戒しなければならないものになっているのではないかと考えられる。

4. 崎山 円

ドイツから見た典型的な日本

—ガイドブックにおける日本描写—

ステレオタイプは一般的に否定的な、そしてさらにしばしばまちがったコンnotationをはらんでいる。しかしガイドブックのようなツーリズムメディアにおいては、ステレオタイプが豊富に使われているにもかかわらず、そのような意味はない。むしろステレオタイプはポジティブに作用している。この論文ではドイツのツーリズムメディアにおける日

本のステレオタイプを、富士山の描写を中心に扱う。そしてその中で、ステレオタイプの形成と維持のメカニズムについて考察する。

第一章ではまず、数あるステレオタイプの定義の中からドイツ人文化学者クラウス・P・ハンゼンの定義を引用するとともに、2種類のステレオタイプ—「オートステレオタイプ」と「ヘテロステレオタイプ」—について考察している。この二つのステレオタイプと「自己描写・他者描写」の関係性を明らかにすることで、ステレオタイプの形成と維持のメカニズムの糸口となる。またステレオタイプと関係している概念である「偏見」の定義にも着目し、その差異と類似性も説明している。

その次にジョナサン・カラーによるツーリズムにおける記号論についてまとめている。カラーはエッフェル塔のミニチュアやポストカード、名所の写真や文字による描写が載っているガイドブックを「マーカー」と呼んでいる。「マーカー」は記号のようなもので、大量に再生産できること、そしてツーリストの手に渡ることが特徴である。また、それらに載せられている対象物とは「オーセンティックなもの」としてツーリストに受け入れられているものである。

そして、上記に挙げられたキーワードの定義をもとにツーリズムにおけるステレオタイプ形成と維持のメカニズムについて一つの仮説を立ててみた。とある国家に属する人間が自国のあるすばらしい対象物について描写（自己描写）し続けるとする。他国の人間がその国を訪れ、その描写の影響を受け、他国でもその描写（他者描写）が行われると同時にさらに他者を意識した自己描写が続く。他者描写はまさにガイドブックの中で行われており、それを見るツーリストの目的地を左右する。ツーリストはガイドブックに載っているオーセンティックを求めて、自分の目でその地を確認する。この行動が繰り返されることによってステレオタイプが形成され、維持されると仮定した。

第二章と第三章では上記の仮説の具体化と実証を試みている。

第二章ではまず、『万葉集』に収録されている、山部赤人の富士山を描写した和歌をはじめとし、奈良時代以降の日本人の絵画による富士山描写を用いて「自己描写」を説明している。

第三章では江戸時代初期に日本を訪れたドイツ人エンゲルベルト・ケンペルの『江戸参府旅行記』、江戸時代末期のドイツ人医師フィリップ・

フランツ・フォン・ジーボルトの『江戸参府紀行』、そして明治時代のドイツ人記者アルトゥーア・ノイシュタットの „*Japanische Reisebriefe-Berichte über eine Fahrt durch Japan*“ から富士山描写を引用し、「他者描写」を説明している。さらに、3人とも日本人と一緒に旅行をしており、そのうちケンペルとノイシュタットは、日本人による富士山の「自己描写」の影響を受けていることが明らかである。またジーボルトとノイシュタットはケンペルをはじめとする過去の訪問者の旅行記を読んでいたとそれぞれの著書に記述されており、この二人は「他者描写」の影響を受けていたことも明らかである。

次に現代のドイツにおける日本のイメージの概観を探るため、2000年以降にドイツで出版された日本旅行者向けガイドブック2冊と旅行会社のパンフレット5冊に載っていた写真を地理学者ロバート・デイリーの方法に則り、また彼の方法で不足している部分を細くしながらカテゴリー分けを行い、リスト化した。このリストから日本の特徴がはっきりと浮かび上がった。また富士山の写真はこの結果では2番目に多く使われており、現代でもドイツでは富士山が日本を表象するもののひとつであることがわかる。さらに詳しく富士山の写真を分析すると桜や東京のビル群といった、他の日本のステレオタイプも一緒に写っており、日本の典型がより強く押し出されている。

その他、ガイドブックの富士山に関する記事では過去の「他者描写」や「自己描写」が互いに影響していることが明らかである。

第四章では、第一章で仮説されたメカニズムが第二章と第三章から導き出せることを説明すると同時に、さらなる問題としてツーリストが触れるガイドブック以外のメディアの関係性についても提示している。